

# 時論公論 IV

## 静かな総裁選を考える

### ——人を残せるか？

政治アナリスト  
元杏林大学教授

豊島典雄

#### 政治家には三つのコース

佐藤栄作内閣時代に竹下登官房長官の酒の相手をし、酔った竹下さんから「豊島君、政治家には三つのコースがある。まず、君の故郷・栃木県第2区（当時）の〇〇〇〇〇〇さんのように、大臣においてはすれどもなれないコース、次に、大臣にはなれるコース。そして、不肖、竹下登、総理総裁のコース」と言われたことがある。

政権党の自民党の総裁選は、現代の関ヶ原である。近年はこの総裁選に活気がない。

最近の政治家は、第三のコースへの執念が不足しているようだ。

ところで、総裁選に参戦する政治家の行動のエネルギー源は強烈な愛国心と権力欲であろう。理想達成には権力を掌握しなければならない。

「立派な政治をしたいという政治家の使命感と権力をとりたいたいという権力欲は分かち難いものである」（フランスの政治学者ジュブネル）。

#### 幕が開けたら

#### 芝居は終わっていた

自民党総裁選は、3年前は現職の安倍晋三総裁の無投票再選だった。今回（9月20日投票）は現職の安倍総裁VS石破茂元幹事長の二騎打ちだった。

自民党総務会長の岸田文雄氏はハムレットのように迷った末に、立候補を断念した。総裁選は、細田派、麻生派、岸田派、二階派、石原派が安倍総裁を支持し、幕が開けたら、芝居は終わっていた、という感じだった。現金が乱れ飛ぶ昭和の激しい総裁選を思うと随分、静かになったものだ。

#### スマートだが胆力不足

我が国は中国、北朝鮮の脅威にさらされている。現在の世界の政治家を見ると米のトランプ、ロシアのプーチン、中国の習近平、北朝鮮の金正恩という「独裁者」の時代である。

これらを相手に日本の国益を守るのは至難の業である。経験豊富なリーダーが必要な場面であり、現職の安倍総裁に有利に働いたといえよう。

政治には、妥協を迫られる場面も多々ある。

電力の鬼・松永安左エ門は「小さな妥協は小さな人物でもできるが、大きな妥協は大きな人物でなければできない」と言っていた。

最近の日本の政治家はスマートではあるが、胆力不足である。私が番記者をした佐藤栄作には目を正視し得ないような迫力があつた。政治

家らしい情熱、迫力が感じられる人物が少なくなっている。

#### 百年の計は

政権党である自民党の人材養成にも深い配意が感じられない。「二年の計は穀を樹（う）うるに如（し）くはなく、十年の計は木を樹（う）うるに如くはなく、百年の計は人を樹（う）うるに如くはなし」（管子）。

第三の総理総裁のコースでは、自民党三役、特に幹事長、内閣では外務、大蔵（今の財務）、通産（今の経産）大臣経験は必須だった。

昭和47年のポスト佐藤の総理総裁の候補である三角大福中もこの条件を充たしていた。

三木武夫は、自民党幹事長、外務、通産大臣等を経験している。

田中角栄は自民党幹事長、大蔵、通産大臣等を務めている。

大平正芳は、自民党幹事長、外務大蔵、通産大臣等を経験している。

福田起夫は、自民党幹事長、外務、大蔵大臣等を経験している。

中曽根康弘は、自民党幹事長、総務会長、通産大臣等を経験している。

十分な経験をしている。登板の準備ができていた。しかし、現在、日本丸の船長候補の育成が出来ていない。

総理は、歴史法廷の被告である。成功は政治の絶対目的である。

## 戦後日本に貢献した総理は田中、小泉？

読売新聞の戦後70年に関する世論調査が、2015年2月25日付けの同紙に掲載されている。戦後70年の歴代首相でその業績を評価する

首相は誰か、とたずねている。①田中角栄、②小泉純一郎、③吉田茂、④佐藤栄作の順である。

戦後の総理で、人気があつたのは日本列島改造論の田中角栄、郵政民営化の小泉純一郎だが、中曽根康弘

元総理は著者の自省録で「要するに、『列島改造論』というのは『田中式開発発想』にすぎないからです。とても本当の政治哲学といえるような代

物ものではない」と切り捨てている。

首相になりたての田中角栄は、朝早くからバスでやってくる大勢の地元

の支持者から陳情を聞いて、鯉に餌をやつて官邸に出かけるという毎日だった。中曽根康弘は『列島改造論』

はそうした日常から生まれた産物。『朝という時間は1日のうちで1

番大切なときで、静かにものを考え、国策を練る厳粛な時である。だから

総理たる者は、朝は自分のために取っておかなくてはならない。それを朝早くから選挙民を集めて陳情を聞くとい

うのは、総理大臣のやることではない』と私は批判したものです(『自省録』と厳しく批評する。頷ける。

小泉純一郎に対しては、「総理たるもの、本来ならば、大黒柱に当たる

背骨を組み立ててから、手や足をつくつていかなければなりません。憲法改正問題、教育基本法改正、財政

十年計画などの国家100年の計を考へるような大綱をまず国民に示す必要があつたのです。それから、道

路公団をやる、郵政民営化をやる、こう言わなければならなかったのです。順番が違うという。同感である。

逆に、不人気で石をもて追われた

感のあるのは、安保改定の岸信介、沖繩返還の佐藤栄作兄弟である。中

曾根元総理は「私の知る総理大臣で、宰相学を本当に身につけていたの

は岸信介、佐藤栄作のお2人だけ」。岸には、「安保条約改正案の内容は非常に正しい」「政治家としての

人生を賭して、大勝負をやる人でした。明治維新の志士のように志が高

かった」と言う。高い評価だ。

## ぶれた石破茂氏

さて、今回の自民党総裁選だが、安倍総裁への挑戦者の石破茂氏の憲

法9条についてのブレが気になった。憲法9条1項だけでなく、2項も

堅持した上で自衛隊を明記するという安倍総裁を批判し、2項を削除して国防軍にするよう主張していた。

「今まで自民党がやってきたことはなんだったのという話になる。自民党の改正案は通りつこない、という

のは敗北主義だ」と。その石破氏が、今では、「9条改

憲を優先せず、参院選挙区の合区解消や緊急事態条項新設を急ぐべき」

(東京新聞、8月11日)と言う。

マックスウェーバーは、「断じて挫

けない人間。どんな事態に直面しても『それにも関わらず!』と言いきる自信のある人間。そういう人間だけが政治への『天職』を持つ」と言っ

たが……。

## 人を残せるか？

「地位は人をつくる」。吉田茂は池田勇人、佐藤栄作に地位を与えて育

てた。「晩年の吉田は『財を残すは下、仕事を残すは中、人を残すは上』

という言葉をよく披露した」(岸本弘一著・政界ライバル物語)。

佐藤も福田起夫と田中角栄を党と内閣の要職に就けて競わせた。中

曾根康弘も安倍晋三、竹下登、宮沢喜一を競わせた。小泉純一郎も安

倍晋三を育てたと言えよう。

安倍晋三総裁は人を残すことができるだろうか。ポスト安倍で名前が上がる者も、まだ経験不足である。

岸田文雄氏には、幹事長、財務大臣の経験がない。河野外相も自民党

三役の経験がない。小泉進次郎衆院議員の人氣は高いが、まだ副大臣も

経験していない。

総裁選後の人事で人材を登用し、どう競わせ育てるか?注目したい。